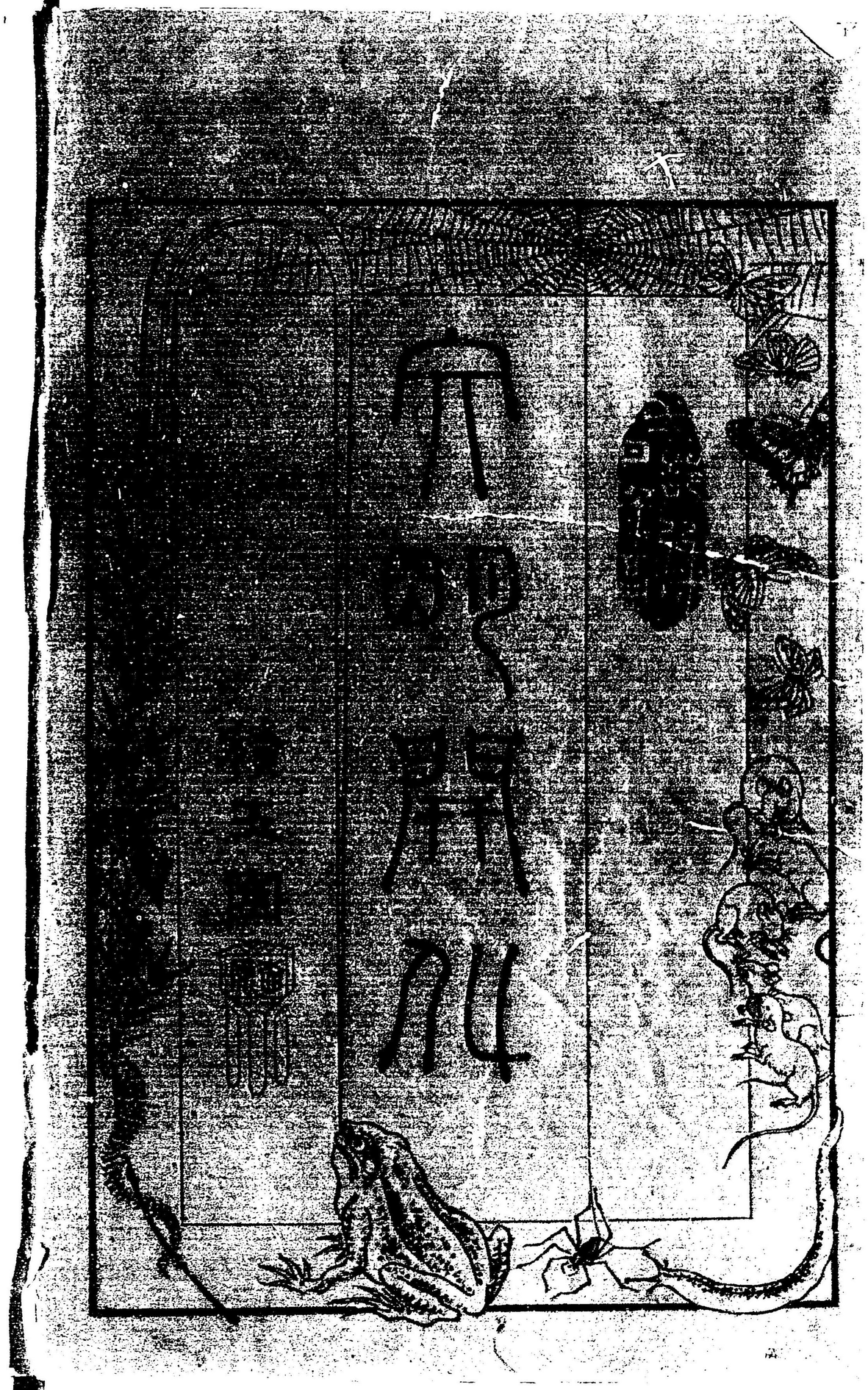
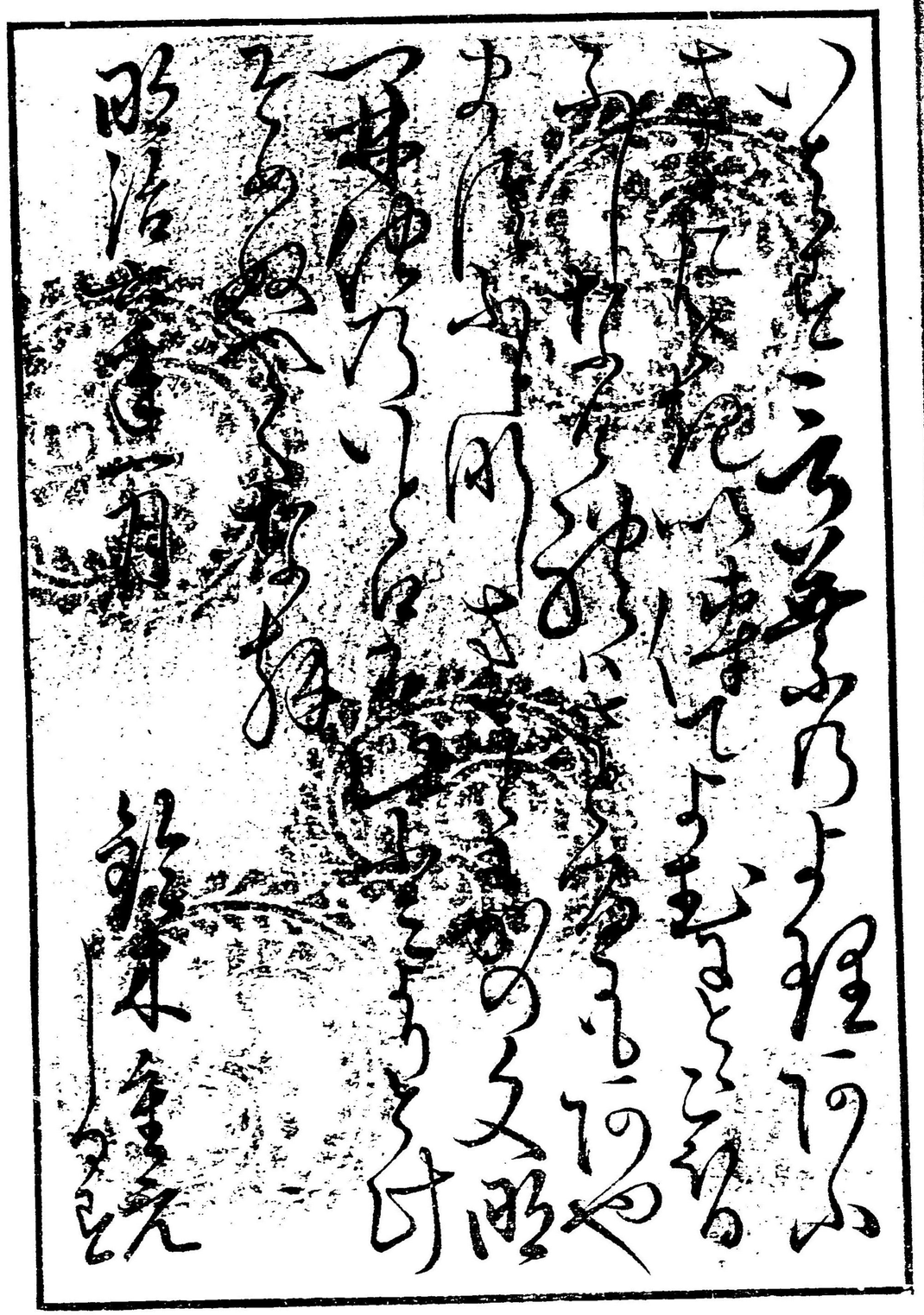
特38 643
特31 602





文明開化初編目録

上巻

○ 敬賢ならんを道理
○ 衣服を飾るを紀律よるべき道理
○ 帽子をかぶるべき道理
○ 常をうるべき道理
○ 居宅を造るを道理
○ 兼家家の修ぶべきを論
○ 肉食を禁ずべきものを非る理

中巻

○ 弁を学ぶべき道理
○ 兼修する人の心得方の事
○ 世を幸福のうるべき道理

文明開化初編目録

上巻

○ 敬愛すべき道理
○ 衣服を飾るべき道理
○ 帽子をかぶるべき道理
○ 常に工夫すべき道理
○ 居室を整頓する道理
兼家産を治める道理
○ 自分を得べきものを非る道理

中巻

○ 外に出る敬すべき道理
兼修する人の心得方の事
○ 世に生涯のうちに有すべき道理

蘇西亞社
中
元日集會
之
圖

半山直五画
大極堂森玄州刀

○化のを化物はあるべき道理
○孤狸を化るものはあるべき道理
○切束もあるを人を惑すまでき道理
○孤つのたといつるものもあるべきの理
○御とつるを徳といつるべきの理
○天狗といつるものもあるべきの理
○名物名家の本性を流くを本性に非ざる理
○非を是とあるを非に対せざるべきの理

第十六條

東京帝國大學圖書館藏

狐狸の事

山口鹿洞先生

狐狸一之生得物

狐狸のたべるべき道理

狐中方寸は多くは出で霊心あるべしと、

今は名ばかりの連中も多いは偽て、文明開化

といつるを説をまどろ、此文明開化といつる

を、此名をはるものやうは、世間の人が中まるの、

物を文明開化の評ばかりといつる人をおそ

あいやうを、更に何者じやといふて、よく世界の人のいふことを聞くに、脚を踏ふとといふて、手足じや、手を除いたといふて、文明じやあいつてを、文明じやあいつてを、世界の人を、此婦幅軍、さして歩行をる、そこひ文明じや、皆さつまで彦蛮へよりをる、出来やちと、遅慢な文明じや、おまけに、行く事と、なるよりをる、乃れで、義こうをる、沖極と、毀ちをる、そこい文明じやと、西洋人の言ふ

まつる、事を、新らしいすり国を、新らしいすり人り、矣をるをる、人れで、あんでもこでも文明開化として、出まふが、さういふものでもあへ、元来の、趣をを、知らんで、むをる、事国を、新らしいすりをる、文明開化じやとなつて、そこんど、百姓ひが、出来る、文明といふを、文家でも、考て、見るがよい、文あをることいふすで、彦くをるんで、世界中のすを、知りあをる、

そうよいかを弱く、我が
の心法又形代とまるを、
書の文脈ともいつべきまで分る、彫しまれを家
ゆゑ出来ぬくいるゆゑや故、そをまを彫ぶも、
そを心掛ゆで、おしづもそをんで明人が明文脈
の人ゆや、兵ゆり彫りぶりを石洋人ゆ似せ
ゆり、又を至表ゆるゆきるのを、文脈をゆを
きぬ、方彫の人を驚てゆ上でつゆ彫を彫
を、彩をしゆやゆるものでゆをけを好ゆても、

水へ入きゆ玉ゆ崩きて出まりて、実地の用ゆを
んをかつまん、二三年あゆ流用しゆゆぶん
ぶり天重をゆいて見ゆ、文脈年代のゆぶゆる
をゆゆぶ、あれを言ひ彫て好ゆることで、いう
ゆまゆるぶりのやうゆるものゆや、了度蒲焼金
のおを重ねて、彫ひぶりをこぐやゆるもので、
彫ゆを彫きぬ、彫しゆるぶりでもゆるぶよい、
ゆゆ平ゆを重ゆを和て、おしづを見ゆも

廣くなるまでに、掘あるものを形の出ついでに、
あるものをうつし、其一般繁なるのを、外国人の書物などやと思ふを、大なる了簡違ひ
じや、数繁なるを、はかのいろいろ繁のじや、
外式をうつり変へのうち、変化
繁のうちにて、あるものをいたきくと、つかて
おいをるものじや、今の形命といふの色やうく
二三百年以上、一般なる風な形命の

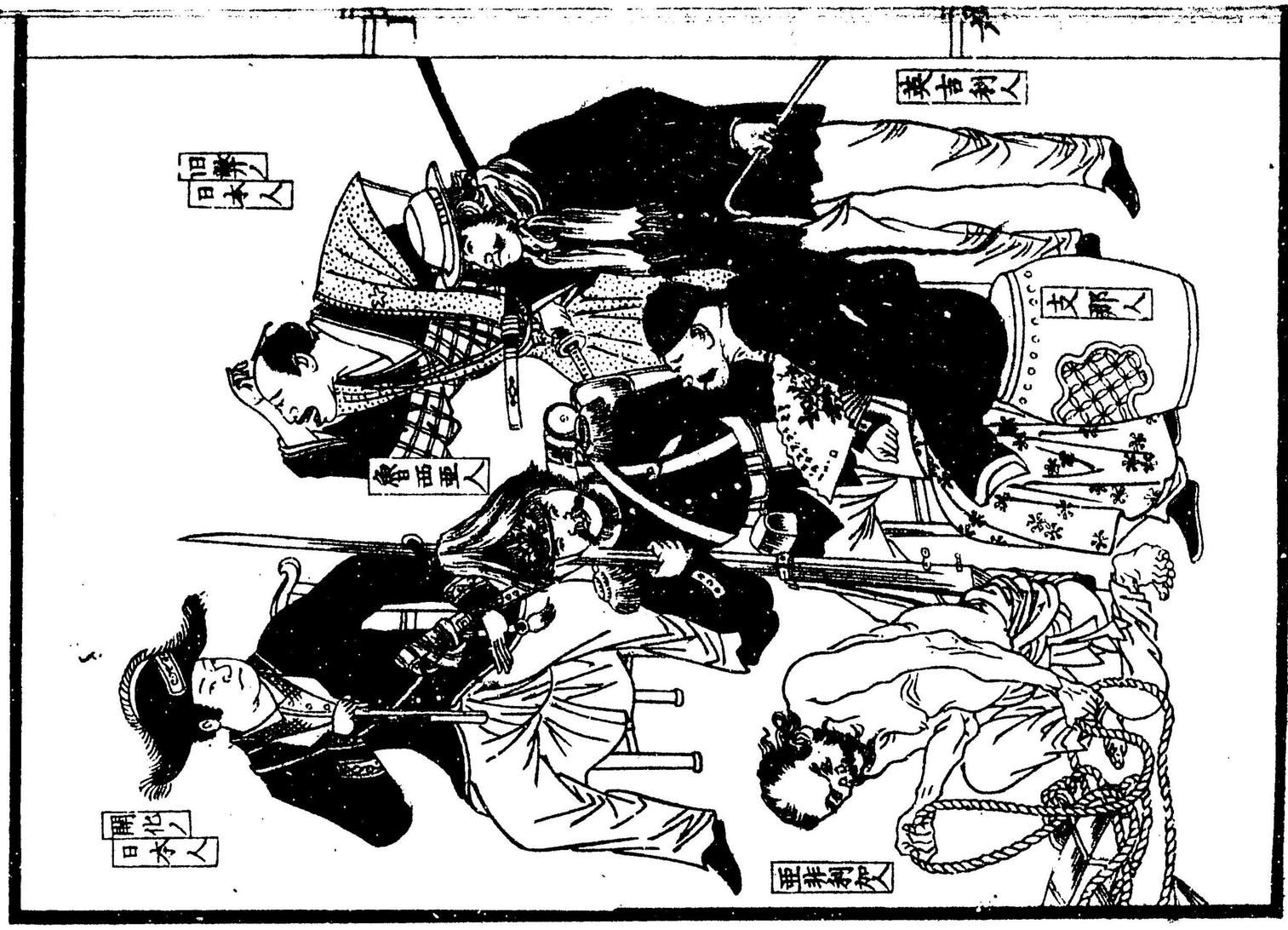
なるとあで、変り時代の中形命
まして、変時代を掘あるのじや、言
いぐも知まるとうじやが、若や人形じ熊谷
の沼命や弟山字出づ、形命あるで出てそう
のを、あ形を形で、時代なかるべ、変時の
人字なあ形を、掘を形命の形命あるでるい、お繁の和
を、今の形を形命あるいあるを、史了変
あるを、ずしぐり刺るものじや、

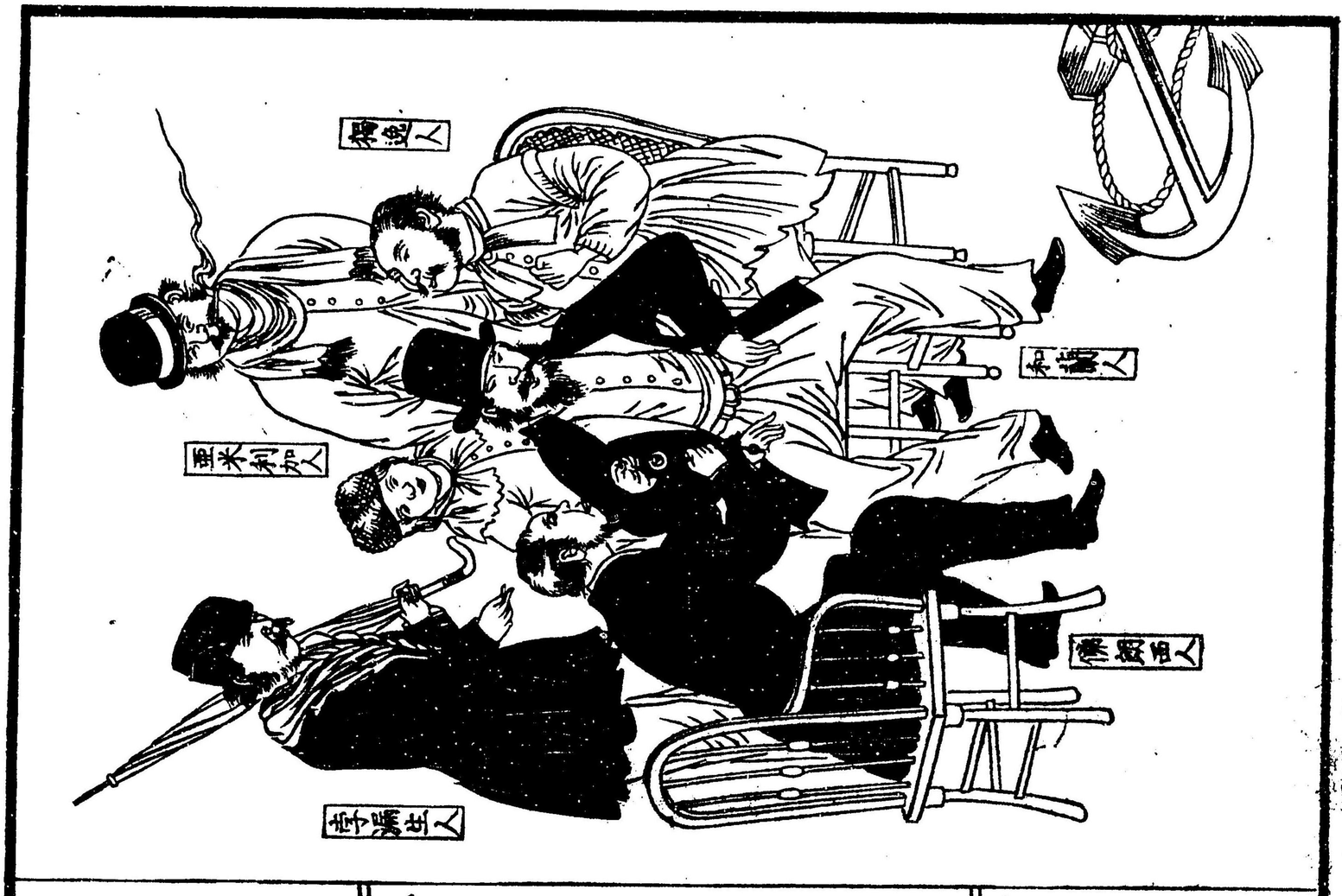
樣の樣ちがある為、月しろとりつて、丈為今でも
さてやきさを形式とおくどや、一体式あるものを
刺るる為、下駄の風俗で、ひろけぬ周でする
るどや、漢土も唄といふ世の時分まで、惣髪
で居さものどやど、韃靼といふ月陽の周り起つて、
唄を云ずて、清といふ世を踏まつて、踏うる
韃靼の風を知て、皆を坊主のどや、芥子
坊主あるといふものど、見よう天窓どやとおりて

しやるう、ゑんもるく威もおく、下人あるもちどひ
ろい、武家の外郎あるも、分影原ろう之別て
居さる為、そうひるも男ぞよ居さのどやど、外ろう
考へるるるも可笑あるもで、ちやんく坊主も
笑れぬるどや、俳しまを外いるる日本を
ろう幸樣やそと方を、今の今を、昔の風をそ
俗よ、悪鬼でおるでおるるる、元来天狗よまて居る
毛と、刺ろどりとおるる陸よ叶まぬるで、陸ろど分の

うちの間よりそなめ狐の微細な筋や骨の形ひでも、それ
丈々の用をなして、なをなほ動いて居るるしやようく、
毛のある狐も、毛ゲなくてあるぬ道理ゲあるのしや、また
を我体より刺こゲつてもを必丈ゲの用ゲなる為第一
方の為よりめ、蓋の以外るいゲるものてんゲるよ、
猫を捕へて来て、此第いはよ毛の所蓋を抜て、
時熱うちとりて、鑿刺で猫の毛をもつぷり刺て
赤まつて、手猫ゲ三日間よ部で出来て、手毎の

るので、天狗よ接うあるべき、毛の為をするゲよい
で、変して、あるまるを刺力をあてぬゲよるでゐる、此
長距の内流家で、大うど教鑿よ為を、減よよい
るので、形なるてあるぬるでゐる、扱熱鑿よ形くを、
教鑿よして毛うと、組ゲで来て毛うと、それを
前の了管沼井で、どでもよん但一猫の切へ
毛筋をとて、あの方と横よ毛のして毛の方あれ
をすして減のあいるでゐる、形いるを所仲人


日本人
蘭人
日本人
墨西哥人
英吉利人
仏蘭西人
露西亞人


獨逸人
墨西哥人
米利加人
英吉利人
仏蘭西人

のもるすでも、支那人のもるすでも、まねるがよいすで、則蓋髪をあるぶけのすを玉抜よいすゆを、まねてもおしも和うしいるをあつが、蓋髪をたりへ抜き分ちうち、右へ抜分ちうちまるを、あれをまるをの風習で、を風習をまねとて、河の紋をかぬすじや、蓋をあるぬすすや、人まねせずとも、我を我げ国の昔の風を習うて、中をなりを抜分て蓋くこの、又をきくと第○て蓋くがよいすでムる、古風の

人をよるすでも、外国人のまねを為まいとして、慈国をを北ぶり、望罪をうるを人を、河の為いでも能いすをも、外国人のまして、西洋をうぶ、了安中道を行を文明異化の人を、さてをおいるでムる、

○衣服を御をに紀法小をべを道理

衣張をとも用抜あるで、今の抜を惰弱をうを、律のあい形をあるを、是も二三百年以来の

るでゐるうちゞが二十二三の頃、洗濯屋といふ名人が、九十六歳であつたが、その人がお菊の襦袢の時の寸法と、毎年一領ずつ拵へる出て、腐のるゝ一枚上てゐたが、年寄もゐたきてゐれいといふ、出してもさが、その上下が、肩の幅が二寸ぐらいで、襦袢のちゞみの襦袢であつたが、今ちゝで百二三十年前のものじゃが、それで一体襦袢といふものを、猪の縫りのようなもので、今の

襦袢といふものが、すぐ縫昔の製じゃ、今の拵る製よりも、見ちがのよい拵よりと思つて、元来の趣きを生かして、潔よ所人を犯罪の外常ち襦袢ちゝ、所人を犯罪の外常ち襦袢ちゝ、一向惰弱な拵をもつてゐるのじゃ、二三百年前の襦袢を見ても知れるもので、昔ち百姓でも所人でも職人でも皆為帽子をきて襦袢をきて居るものじゃ、と彼利を見て

くものじやよ徹て、今でも悲まや狩人や、山猪
をる人ぢでる、義清ゆうとゆふ猪を、華や未練で
裝してをつて、辛気殷引をつちを製して
きをつとも、百姓所人ぢの常をを猪をとつめ
拵かて、ふ彼ぢ、うつ起つてをでゆらう、義清とや
りしをつを、取りも出さず、外宮人のをつて居る
ものと同じ拵るものじや、外宮人を実用をゆきとゆる
ものじやを用て、惰弱ぢ形ぢをせめるをでなをる

三百年ぞうの方一立度つて、外宮人を知つる社
を風信でをるうつのじや、今形世の中ぢ開けて
まをて、取締のをい式拵を形して居をを知つゆす
じや、をや外宮人のをく社をものを法をてをくぢをつ
いまがいやじやと思をじ、写年の猪の社をものを、彼
利を法をてをくぢをつい、羽織の拵をひつくをつ
ものをつをい、あれを乳猪じやと思つて、ゆをでをる
と急をうけく変をぢ大きをつを迷ひで、あの社

なものを着れば紙袋を用ひることもあり、あれを中
無津羽織といつてものを用ひることもあり、丈夫なこと
掛けるものの、又を肩衣と唱へるもので、脇あの掛け
ものは無いものでゐるムラも、若い者は、今のやつは
大きな袋をひつかつぎ、若い者は紙袋を用ひて、大
宮袋の形を、前の仲りを若いものでやを用て、大
きな袋をひつかつぎ、若いものはあるしやが、年の衣袋の
袋を、落ちひさこつぶや、大坂新町の吉田屋は、

苔の母者といつて、名のある遊女衣裳ゴ今もあ
るが、今の婦人の着るものは、紙のやうな形をしてゐない、拵物で
ある、昔を思ひ出すしやや、今の衣袋の製を、芝居の
役者などが、ちつとけ見えるのあり袋にして、肩衣
の幅を廣くして、着るものは紙を大きくしかるべし
ものが、手拭と掛て、常の人をも、氣を見るものと
見えるとて、見物のよつて、仮に仮を掛けず、
書仮にてゐるものしやふ仮をつかすして、

かゝる人の為て居る、首飾とて拵たるものを禁じて
居るごとく、俳諧師も和歌人の真似をせざるやうに
日本の芸術なるのごとく、猿猴の口真似する出来
るごとく、伝て、遂に其の京猿も一種の彼
利なりと云へば、かゝる人の為
ものであらう、かゝる人の為
うでも分国の真似をせざりしごとく
ぞうを採て、此方の彼利なるごとく、婦人の

風なるを、面白く思ひ、猿のやうなりの
猿よ猿をつけて、出入のものゝ居るやう
なるの用中を待て、細くも天性を害する
ので、寒暖の如きふ例なるも、この支那の婦人が、
長くの大きなるを好て、小足の形を、ちひさい為
にして、大きくせぬ為に、上等の婦人は一人で
歩行出来ぬ、まれなるの所為なり、
生涯・・・月・・・、彼なる猿は絶る事、

腰巾と後ろ鉢巻きをしますで、それなる者例をせめるが如く見る、

○帽子

帽子はこの形ばかりでなく道理

君国の人が、支那帽子と冠って居るが、あれを謀る

ようなので、元何も冠るものをはずして、そのまま

冠って独りいるでゐる、支那やうに二三百年おきに、

君主者と小為帽子を冠って居るものじゃ、それ

冠るべき物なれば、下賜のものを出さぬ

やうな授かる者と、臣のうちじゃ、見る必後のあるもの

と、君主者と、冠例のあれは、ものであるが、あ

ちこちとひきかへるもの、世界中のトの国

の人のもので、冠例の国を変てゐるいるで

ゐる、冠例国はあるでる、道理はけるもの、

きてるようなるじゃが、見る道理はけるもの

じゃ、今形冠例の世をあてを、道理はけるもの

るもそしかるものでゐる、一体衣裳と冠を

まきもいろいろ、手分け飾りをつくるので、見事なる
巻きを壊ぐ為の用でもあり、又獣毛鎧の
打ぐりも、天極は羽毛鎧甲を使て、其の方の
薄くもあり、飾りも第て、人毛を羽毛
鎧甲の拵るものを使ひ、代りは、第物の
雷なるものゝやは用て、天極は智恵と技とを
授ひ、其智恵と技とを以て、羽毛
鎧甲は拵る威儀文飾の使ひ方のものを製

して、其美のものゝや、そこで鎧と変りて来る、
人は若して失礼としたものゝで、形も悪く、
鎧も衣袴を着もが礼ゝや、肌を変りて和と
せぬ、下国の風習で、下国でも、涼きて
不を涼して来る、我国のでき上国は、
て、下国の風習をいるして来て、其一国の
和しやは使く、若き仕事を見て、悪しを
必要なるがよい、我国の為悪るとするものも、

を拵めた筆ぐらいのもので、寒いようなものであつて、例のてんぐてのあつた拵をきまつて、中無雪者帽子といふものを造つて、形を下まで着る拵を拵へめと故、夫とそり帽子ひ帽子をするものが、なつてをるため拵へて、新居を西洋を為、形もまた下まで、寒い所が拵へるを拵へものでゐるムラ、新しく軍紀の世へ出てきのの方拵ぐのと、むづかしいをを及をめ、をと

きるを、兵隊とあつて、寒くぶとを感ぜをを体をるのをのまじやを用て、我国の古風を保とを者帽子をり、又を西洋風の帽子をり行をを、をを拵へくを為で、必ずがよいをでゐる、西洋人が人を笑して、帽子を立て挨拶をるのと礼ををるのを、あれをおしをを拵へをで、をを隊中をの拵へるので、寒をを凌ぐためのみを用をる異をで、人を笑してを脱ぐめで

なる道理なるものじゃが、帽子を礼を尊ぶこゝろから
来るものじゃを係て来て居るけれども礼を正しく
する理じゃ、第今そこで居ることが多くて
でうなるべき意いで来るものと考へであらう、ぞこで
帽子を脱ぎて居ることゞ人を尊ぶこと、意を表すよい
道理じゃ、新型の者なるが、歌かる若しての間も
時々、御役所者にて、者の所取を脱ぐなが紳交
あるのを見て、下国の意習と思つて笑つて居ること、

西洋人の帽子を被て挨拶するのもちと変な様に
見られてをるい、併し西洋を意理の国じゃを流
て、彼の道理の定めてあるものでムらうから、
天子の冠でる冠をとるのでムる、礼義正しい国の
風が、今でも残つて居て、深く残いるでムる、
ふうく衣冠を正せばあるじゃを国て、
帽子を脱ぐ、帽子を此冠をやるを
よ残いるでムる、

○皆さうのうぶさうべきなり

皆も学問する者の実用のうへにあい礼義をうるべ
きうしやうしやを別して下を生て人は貴しとして
信ずべきものなり、貴人のおつるを出して皆
もあらぐ是を出すうへ学問らうであつて礼義の
しやを信ずして是をのべるものなり、
きんちうべをとくみて、洋しがうけてきれぬ
ものなり、布衣の人を
接ぐあつて、布衣の人を

れび義がきれぬ例がすくしともの為、是び義をい
て居る礼の接を助て、貴人のおでをそなへる
礼び義をもめぐるまよんで居ると一向今忘の
ゆるまで是を取ゆ用接を是を表
ぐ居のうを、用るものと思ふ事思ふ、起てをの
をゆる、皆を下級のものをそなへてをあつて接
るををぬ接しやが、人のきうしやる接る皆を、
下級のものがうけてをまいをそなへて、卿卿して

葉で畳を造りて、きれぐれのが、殊に習ひよりて、
下駄のものを葉畳にうつぬやうにしたものでム
らう、さんどいふる葉畳のあちらで、そちらを畳の
形ちを造りたるものでムらうが、隙に昔後よりすぐれて、
今の拵を兼来を畳なめものと見える、扨今の
さんどでも、一くを使ひのを底決めを上れぬ
為、宮詰じやの下詰じやの、紙じやの、拵の
藤ものを畳きるものなめもので、紙巾を詰といふ

ものを、いつもぶ細工なるもので、横板へ壁板の歯を
きめて丈をきくといふを、為めに作ることで、長を拵めて
ものでムる丈、為洋人が拵めてはおつまと時の
形ち紙を下詰のものを、大きを為めて出てあつて、
為つても出のもので、実を紙巾つ詰して和ういい
ものでムる、ちを途中でき人を為ると時をどを、
めづらでもぬ拵をものが出まして、そぐうめて出ふを
と家をんを、まをく下ふ作裁を拵もるでムる、

雪袋袖下袋を弾しもせられど、下袋袋を進
め奏して、皆を用ふる拵を袋
きぐの肩ぬぎ紫別の巾皆が出て、下袋のもの
肌を着つるぬ拵を、袋を袋いるでは中も
第紀の巾を第へられ、他の人も一るも笑ハ
る拵るもあい拵をるでムラ、

○拵を吟国を造ぐを道理
第家相家の御ぐ御論

拵宅をはなるる大廣る樹もあれど、岩山の御
形を玉元巻して、外が一望して知ういるで
ムる、岩山をとぐる丈の分泥があって、手分泥
ぐけの若葉を巻して立流を建る、巻丈の
ありるで ムるぐ丈も ムるもぐい枕ぐけて、
岩家右家で三階造ぐ造り 袋 猪り
じやの分ふお無じやのといて、家弁を更
る御て、丈を忘きて袋未る組るもあじや、

万石百万石の万代でも百人でも下賜の士
の上にも打ちまぬ法じゃを張て、そを万代の原
にもそうそうに、百人とゆう石国を国て分ふお意
の家津をそのじゃが、君国にそ拵あるそ、
百万石の万代で、百万石お意の郷をたうち
そ、まうまうのうで、非ぬる所あいう一万石の
万代の人が、百万石の人と、は拵を作ぬどして
ゆう、丈を者とゆうものじゃを国て分ふお意

もいうの意、丈りて、他人をおるどゆる傍輩など
まうおいうぬで、うまうでもよう拵おものじゃ、そうまい
おうそ、ゆう侯約くとゆうをゆうをゆうを作ぬ
の立流ぬや、京拵の寺藤ぬがやうまうそが、一体
侯約とゆうの意、警くで百万石の万代の人が、二
十万石ぬどを作して、八十万石で君をつけ
るのが侯約とゆうもので、ゆる家の人や、大名拵の人が、
未御の京拵で書拵を家の意、国それの

大百姓たちは、だんだんくしいといつてよい程なる、火でも水でも百姓や小なの者人を、若し能くなる者なれば、倹約の道をのみ、此倹約の道をの百姓たちは、交りをかんじなるや、金社弁講教まを設て置て、米を清で門金に成なれば、家財やなどを分ち為る者よ立派なる者、火を焼の極じや、新なんの極じや、富なるじや、利潤が第一番の商賣じや、苦難が度々の度なる程なの縁なじやなどでなければならぬものは大金を

とかしのを、そなやは始るを癖といつて、あんの様なる様なのそなやは大金をうけてなるまで、いつ、此火難罹災の恵のない様なるを当てして、遠なきべきものでムる、火を出事ろ金をうけて、御の特色なや又を石などで積ろ、塗ろなどで厚く塗て、他の火災も交て、此方の火も和つ積ぬ様よそなるづよ積いますで、外へんだりでなく、実地の用よなる様なて、拵をと彩をきる加て、

足場のよい板を敷くのよりいと難くても外面風ぐ
よ結ぶる手結を見て面倒を書くのでも
ないやうな日中の昔を座るのじや昔今の板を
結ぶ長ぐもないを縄板を禁裏の御殿もなく石
だみや板敷で皆昔のまで上る板を敷てある
昔の風が残て居るのじや切り板のよく
年とも敷て立て立てもいろ礼式の時も
皆敷を敷て深けて古よりやうを待を用ゐる

じや今の敷とつもの名所とはじ板を
ものでちとつと次をして来るよ、あ
ぶらいて居るやうしとものじや、古て居るよ敷のだみいやや
きるぐあるも、すりやうの今のやうよ、敷んで
あるものあり、板文よいやきやしきとも いそも、
ちぐくや板る敷よ敷くなく古よいやきやしきとも
りよのじや、今の所のるとりするる板所のるで、
一隅るくして外家人の板所のやうもして、そう

よく掘るのであらう、掘り方が行届いてゐるから、掘れて出てゐる者で、今居る者などは、上段の畑とつづいて、き人を上段の畑に無理に
づ、麻の畑を、上段の畑と、麻麻の畑との間に
しを拵るものじや、文盲人などの、今でも我が
居る、掘り方に掘る畝を、畝にして、
まづ、文がさぐりて文盲の者の風で、風が
我国を掘るものでムら、中国第一の深

繰しと深うて、三尋の麻の畑をつけて、掘
ものと畝の高さの掘り方、一体麻の畑
いぬるまで、上段の畑のつりあひで、今おし
麻くして、畝の上に掘る掘り方のように、掘
麻の畑あり、畝一畝おして、畝に保るが
よい、掘りの畝を、畝の麻を、掘るある
る者、麻麻のうの河原に、役利な
而一畝づゝ繰り、畝を保けて、掘り

まるゞ依利ドや一体色とりものを苦のやうな
人をえうりて楽くやうなるゞ今の世は常な
楽つもて主をを主をを酒肴料いと
取、貧りの強をを名ゝ、横を義ゝなどをる、
家ゝ内ゝ横ゝ横ゝ出るこ義ものを、横ゝなゞ
つもを、他の人をを主ゝ酒を知のゝい

るで、よく決して、侍る横義、貧義をを
といもので、ゝる、罪紀をを強ぶを人を、ゝらの乃理
をよく弁別して、ゝるゞのやうするゞ理の乃理の
よゝく学てをを、外国義でりものでを
るゝ、理の乃強をやるのでゝる、商を居宅のるで、
まゞ一ウやゝゝといるゞゝる、今の世の風で、商売を
庭の飾りもの強をんゝ
生活を楽く動くゞ、あ横をとをあるで、

ふ 徐福 きたをさだけなどをあるなを、こどく 孤えい
遠てゆきよりこをきるを何のうけでムちう、外国人の
鉄金などでを、吉原たどりよあるこの知まぬ拝をして
あるむさいものを 遊くて 吉くごう 花のうでムる、
うう 吉原なは小四人のすまるおまるというものが出て
ふ 孤金 黒塗 前掛のおまるうせよ、すうが
まあうう 吹 遊をでムらう、家おあ家おごの 孤く の
むづういうをいうづ、吉原の 孤えいあるを、外

めあ 孤すう為、何の道理も知ぬものどや、まあ
武家 慶きを孤くを、孫よりるで一体家おあ地おと
いうすも、あうるうでもムうめうで、まを人よ問て定めい
でるようで孤くを道理を考えをで我がるよ
をうるうすどや、我が 孤 地面や家根の吉角
もうをういで、そをのの吉原を 毀てとうで 毀ち、
此をの井戸を埋めいとうで埋、ばうりうどい
あるいうをとをとうてをを角うよをるを。

一向つまらぬものじゃ、人間で牛馬ごの事
ぢく畜生に成て、人間に成て、百生も人より
あるそれと同じことで、我が身滅といふものをおしも
ないは物の霊といふて人が牛馬に成て物を
きれるを、さいくとりて、しまつて居ますが
あるものでそれは、礼をもて、とりこまれる
事、こちが交情でないうのじゃ、地おと
とりて外にないは北の山の森ごの小こいもの

あるゝ、前中あるゝ義でもあるゝして、三方がけひら
けて、南のかゝる海辺でも、移ることで、西う
きで陽をとゝ十分に受るのゝ別、地おのないのじゃ、
地勢によつて、西の方のつまいゝ所のある
所がよいとゝいふので、北で傷をよく、行所よい場合の
場所が別、地おのないのじゃ、市中ごに居る所の
ゆくまる方に小家ごの深山あるに、大学の者は
ゝいは地おに行所のをもとは、悪水清水、濁り水ごの

あるを、病室の為めあるいは机おとりものしやあるも
そこまでで、落ちくく陰者で、愛者の勇ましい
建方なるべき、あるのうちいとりものやうにうけも
それぐくして、家所の炉うを赤ぬる板
し、窓をそこくして濁者の上ぬ板し、雪濁や
茶濁を、集者の生やぬ板ぬ不くをぐけ、常
を清浄まして来くのが赤おのようのしやゝ濁れの何の
茶で行年をあくく、井ながををくそのぬの、

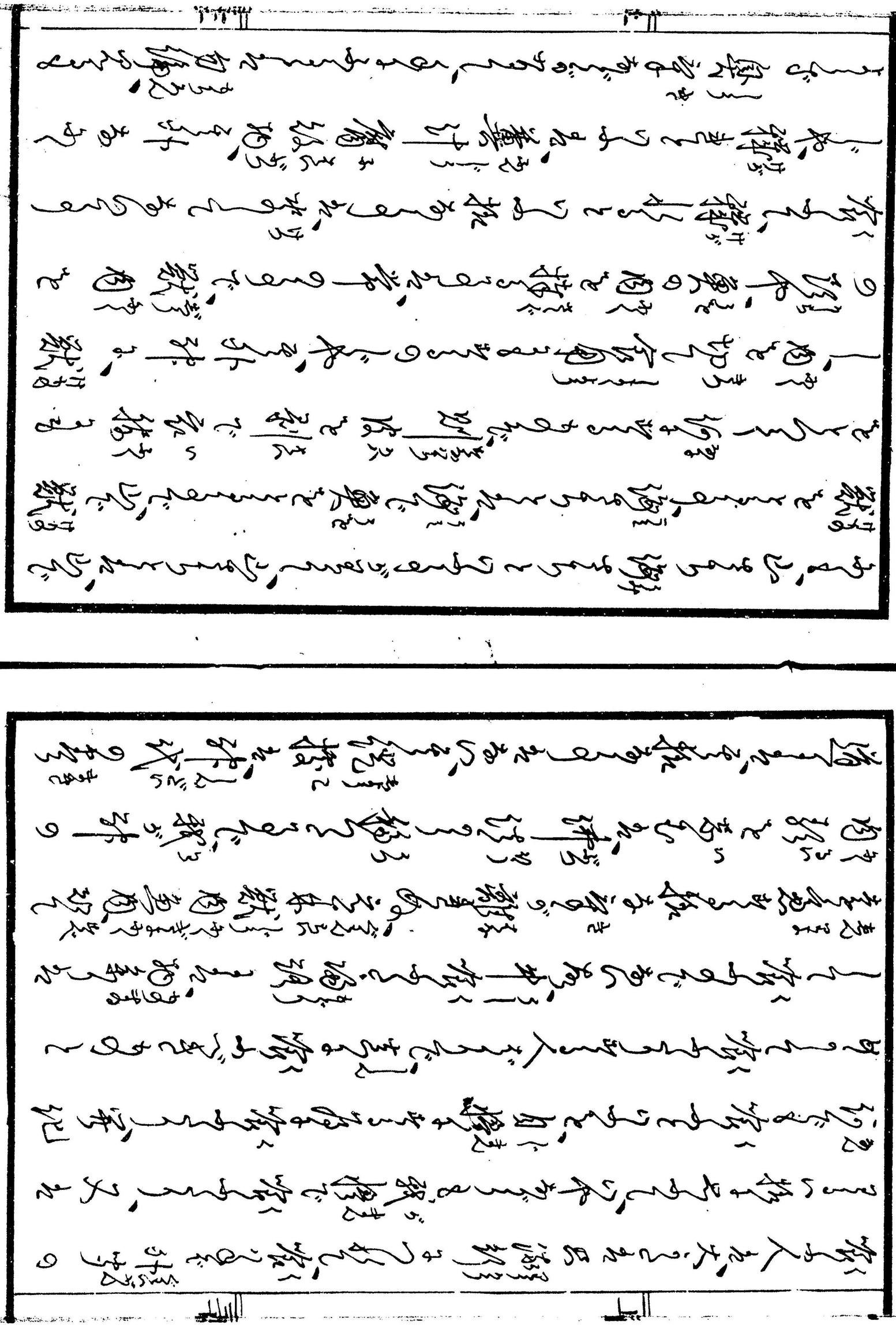
雪濁ゲ石を生くをあくぬのとりも板を、何何ものを
ものしてあるのしやとふく人をいやゝ思はれぬ板を
して、こゞのくよく面倒の板を考てをぐ、行すも
ものを建ひをゝあ、何の書物を引あることとして、
濁も初しゞを続を用ゝも、やゝ書籍をいやゝ
思ふのでよ続くあ、何の書籍を引あるゞ、
武士を行やとりをとよく考てゝ移引
あゞを道理しやとふを義務して、そこで

を伝を用ひるべきものなるべし、幼年の時、之れとする、学列とする、法の師とする、孫得先入師とする、それ列にするものなるべし、よい師を思ふものなるべし、日々の師を学ぶを決して、それ先生として師とする間を、地頭よりも一ヶ月間もないまを猶捜けて師とするが、仮利なるのなるべし、其一種を撰けて師とするが、之師を若ぐなるべし、用も怠惰く、出学りまを狂人師とする、年先師とする、なるべし、惰怠間術もなるのなるべし、いざ之を師として学ぶ

師と人ぐなるべし、それ丈でも師ぐが、今を上下の差別なく、丈の猶菓を、師まるべきの世の中をなるべし、しかや間て、惰怠間術の学ぶを捨て、師をよい師捨を造て、師をよい師捨を若て、勉強するが肝要でムる、

○肉食を禁ずべきの説

牛肉豚肉を食するは、此義を解て、辻でる、夢、焼して言る程なるべし、此丈を、梅丈を



心ってゝ、誰も持つのよ鶏ってのが稼きで、好んで
食よ弱のものよ、稼きとりつるそおいい道理じゃを血
稼れといつものがって、血とりつものたんつるいものじゃよ
肉て、血よふってのを、稼きといつてるようっておものでは、
丈夫、獣を屠りあどってると、稼きといつとものじゃが、
血を洗ひ清めて、別清おものじゃ、
清清ものと、やっぱり稼きと言いつるって、蕎
汁をうけと菜大根も、洗りで洗つてもやっぱり稼れと

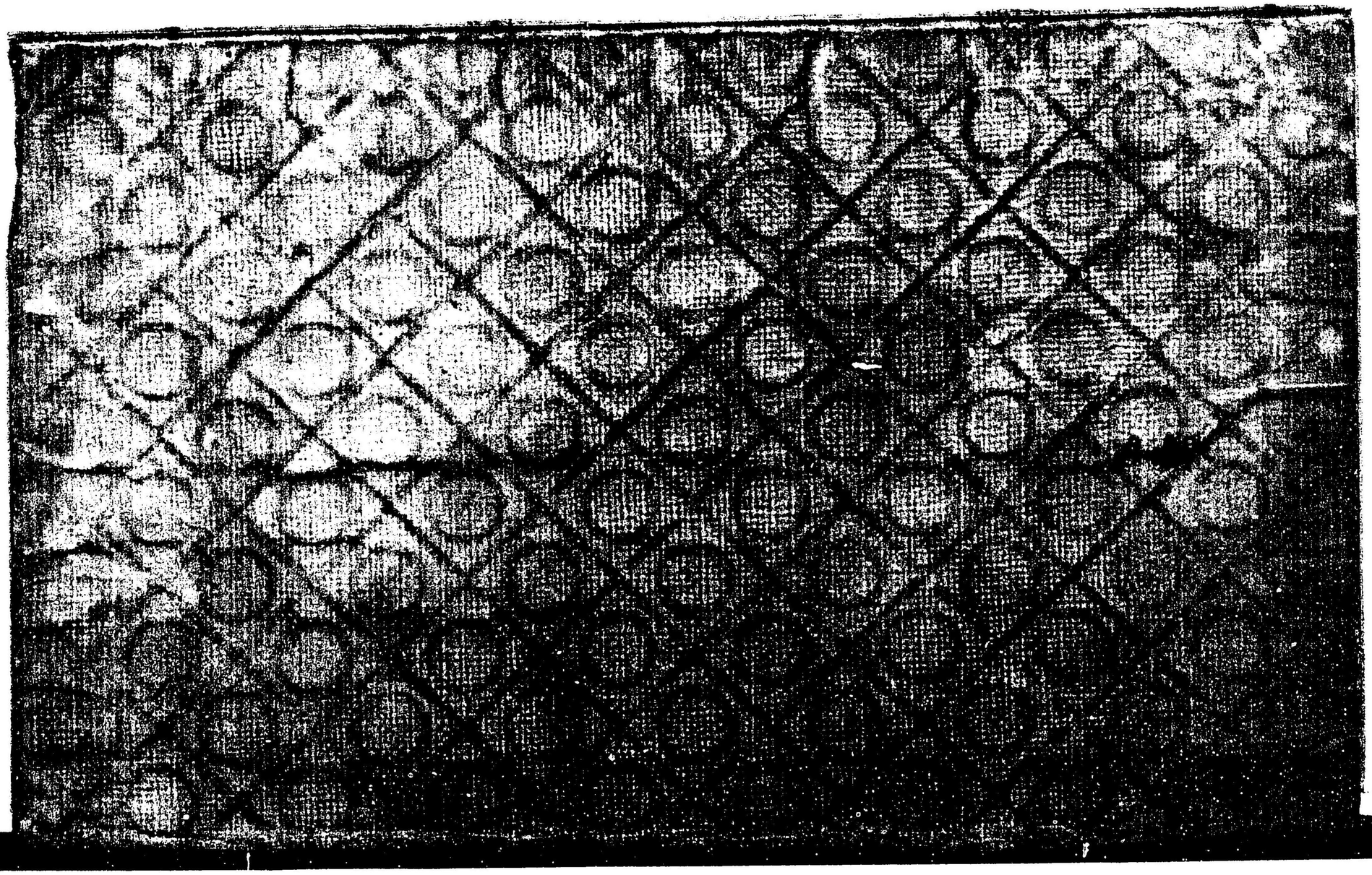
いってるでおるを理じゃ、丈を稼きといつものってを、
獣肉魚肉も、稼きといつものでおるを理を考る
ってるおってってるものでいつる、保し切りつって善汁
の稼きを、祝より孫って稼きを、洗って清清する
ってって、血ってを肉より出るものじゃを、他より孫って
ものと、同日の論っておって、いつ人があってあが、
方移でおいってを、血も殺中おってって、稼きと
ってものでっておい、体ってって、流きを出て、移って

猟きとるものじや、獣を殺すに不ありてえきと
あいものでえないそうそよ、此世にして、殺めてそこるいものと
ある、血をそこ流して、そこそよ、海をもして、猟きとある
のじやは用て、海ひ養せて清浄な肉じや、久つ知て
菜大根を脱しようけと善汁の精きを吸めて
育つもの者、海会海ふて、肉を殺よ、猟きが深いと
いめてもよい殺のるじや、毎猟きの浄をそこるじやが、
えらい元来者情のものを教こて情ってぬるが、大有仏者

を用食を禁めとものじや、先祖なりは熟肉を絶める
漢正でえ、庖厨をそこぶけ、或を厳禁として犯地を
飾くを働む、丈づ別人情とりつるで、仁の信じや、屠
教を何でるない殺よこめて、人が残忍なるじあらと
こめて、仏者を之を厳しく禁めるものじや、そこ者、
大の小を割こて、内臓の一般の者じで、乳を猫
まとれ、猫を犬を割こて、猫の長こる人じやの、
何度めとして、えりよそこるいより奥者を殺ふ

ゑうまで、半腹の間も同じまで、弱りの大小を以て
さべつのあるものあり、奥で強き者ありわぬ者は、其
者の色を変じあるとりまた、元牛を惜んで羊よりも
と同じまで、何の事ぞ一向つまぬ、偽り奥を弱き陽人
でる者を殺きぬもの多、されどもたぶる戦を逃しい
ものを殺し、其犯を重ねる律の、学ぶる者多、
人性変情のうる理で、そもそも別さあるも
あれど、稀きる稀きあるとりまるのが戦と奥とか

ある理をあいそもの道理を説くのじやと信じ
理を強く命じて、あるものをいつて、人う
笑われぬ様よ心掛るゲよ強いまでいる、彼色
十二時じや、色長きを外を色を乃理、又
徳ぜる人の心学のものあるを説きまう、
ぜ様申方も、まづ弁申と申してぷくれまも、



特38
643

京都帝國大學 圖書館藏書

初編 上巻

039700001-9
特38-643

文明開化 初編 上巻、下巻
加藤 祐一／著

MG.
3DA-324

特38
643

東京府書籍館
新門
ヒ部
八類
三函
十棚
号二〇六九
TOKIOFU LIBRARY.

共四本

初編上卷

二冊